



新山口駅の南北の改札を結ぶ自由通路の上部に作られた緑化壁「垂直の庭」。借景は、窓から望む標高392mの禪定寺山

植物学者パトリック・ブランが彩るアートな新名所

新山口駅に誕生した垂直の庭

「垂直の庭が育むアートの魅力は
植物の成長と共に美しく変化すること」



10月3日に開通した自由通路の壁面を約100種類の緑の庭が覆う。「駅に降り立つと植物の匂いが仄かに漂い、蝶や鳥が飛んでくることも。五感を使い、森の中にいるような感覚を楽しんでほしい」(デザインしたブラン氏)



パトリック・ブラン氏。髪や爪、装いまで植物と同じグリーンで統一。「Life=生命」を象徴するこの色を、30年以上愛用する

新幹線と在来線のホーム、線路の上に建設された自由通路。その奥に垂直庭園が見える新山口駅は、今後、周辺の道路や駅前広場の整備が予定され、ターミナル駅として大きく変わる



垂直庭園の向かい側も緑化。ベンチに腰掛けて植物を眺める人も

植物の宝庫であることを知ったのです。これまで私は、世界各地の植物を持ち込んで垂直庭園を作ってきましたが、今回は山口の植物だけで「里山」を表現しようと試みました。現地の植物だけで作るのは初めての経験で、胸が高鳴り、興奮する毎日でした。初めて発見した植物もあったので、ひよっとした新種かもしれませんね(ブラン氏)

壁に根を張り、季節の移ろいとともに植物は成長する。春に咲く花があれば、秋に実を結ぶ植物もある。「垂直の庭」は植物の息吹を感じられる。生きたアート。通路に差しかかると、日常の生活空間から森の中へ飛び出したような不思議な解放感に包まれるのだ。

取材・文/波部美也 撮影/本誌・太田真三 写真/山口市



植物に直接触れられるのも、魅力のひとつ。レイアウトは植物の特性に合わせてつちみ、美しいカーブを描く草木のラインなど、ブラン氏の感性が存分に表現されている

「垂直庭園」ができるまで

調査・採取

2年前からブラン氏が山口県内の森林に入り、山口固有の希少植物など、数多くの野生植物を採取した



工事

植物を植える壁面には、フェルトをベースにした独自設計の灌水システムが組み込まれた



植栽

山で採取した植物を2年間かけて育て、約140種類、1万7000株を通路の壁面に植栽。地元小学校の児童なども参加した



「この草はウチの庭のものと同じ。向こうの花はもうすぐ咲きそうね」
行き交う人々が足を止め、緑の壁に顔を寄せる。3日、山口県の「JR新山口駅」に誕生した新名所「垂直の庭」である。駅の北口と南口を結ぶ自由通路の建設にともない設置された全長約100mの緑化壁。壁面には、県内から採取された約140種類、1万7000株の植物をひと株ずつ植栽、今後は独自設計された灌水システムで育てられる。辺りはほんのりと土や苔の香りが漂い、そよ風が花や葉を揺らす。鉄道の駅という無機質な空間は、訪れる人の憩いの場となって生活に溶け込む。

デザインしたのは、フランス人アーティストのパトリック・ブラン氏。垂直庭園という概念の発明者として知られ、パリのケ・ブランリー美術館や日本の金沢21世紀美術館など、世界各国で200以上もの垂直庭園を手掛けた。フランスの国立科学研究所センター(CNRS)に所属する植物学者としての顔を持ち世界中の植物を熟知する専門家だが、今回のプロジェクトは稀有な体験だったと語る。

「4年前に新山口駅に初めて降り立った瞬間、山々を望む自然豊かな風景に感銘を受けました。その後、県内の森林を訪れると、どこもすばらしい野生